小林 正美

中国の道教

創文社刊

〔こばやし・まさよし〕1943年東京に生まれる．1967年早稲田大学第一文学部卒業，同大学院文学研究科博士課程修了（東洋哲学専攻）．1983-85年，ハーバード大学イェンチン研究所招聘研究員．1994-95年，北京大学哲学系交換研究員．現在　早稲田大学文学部教授，文学博士（早稲田大学）．
〔著書〕『六朝道教史研究』『六朝仏教思想の研究』（以上，創文社．東洋学叢書）

中国学芸叢書
(6)

〔中国の道教〕

一九九八年七月一五日　第一刷印刷
一九九八年七月二〇日　第一刷発行

著者　小林正美

発行者　久保井浩俊

発行所　株式会社　創文社
東京都千代田区麹町二-六-七
〒101-0083　☎03-3262-7101

ISBN4-423-19409-0
Printed in Japan

精興社印刷
鈴木製本所

凡例

一、道書の引用は『正統道蔵』によった。道蔵番号はハーバード大学イェンチン研究所の索引『道蔵子目引得』（哈仏燕京学社引得25）による。

二、仏典の引用は『大正新修大蔵経』と『卍続蔵経』（新文豊版）による。

三、引用文はすべて書き下し文に直した。書き下し文は、文意を理解しやすくするために、〔　〕で言葉を補い、（　）で語句の意味を説明し、読みにくい語には読み仮名をつけた。

四、引用文のなかの注の部分は〔　〕で示した。

五、道蔵からの引用文は、「无」の字を「無」に、「炁」の字を「気」に改めた。

六、経典・著書・論文等には『　』を付した。ただし、霊宝経、上清経、正一経のような、一定の道書群の総称の場合には『　』を付さなかった。

はしがき

道教は中国人の間で長い間信仰されてきた宗教であり、現在でもなお中国大陸や香港、台湾や東南アジアの地域に住む中国人の間で信仰されている宗教である。本書はこの道教の教理と教団とその歴史について概説したものであるが、その内容は筆者の道教研究の成果を集約したものである。

本書を執筆するに際して、筆者は当初、世界の道教学者のもっている道教に関する共通の知識を整理して、それらをまとめて道教の概説書を書くつもりでいた。しかし、道教という宗教の研究は歴史がまだ浅く、本格的な学問研究が開始されてからまだ半世紀ほどしか経ていないために、世界の道教学者たちが共通に正しいと認識している定説の量は極めて少なく、また世界の道教学者の間で広く行われている通説にもまだ誤りが多いように思われたので、これまでの道教学者の学説を整理しても、道教について矛盾なく、体系的に説明することが大変難しいことがわかった。そこで、筆者は道教を概説するためには、自分の道教研究の成果を踏まえて、統一的な視点から論理的に一貫性をもって書き下ろさなければならないと考え直し、これまでに自分が道教を研究して得た知見を基にして執筆に取りかかったのである。しかし途中で何度も、不足する知識を補うために新たに自分の目で文献を検討し、新しい知識を獲得してゆかなければならなかった。そのために原稿の完成は当初の予定よりも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大幅に遅れ、ついに四年の歳月がかかってしまったのである。

本書がその出発点においてこれまでの道教の研究書や概説書と大きく異なるところは、道教の範囲を中国に歴史的に存在してきた儒教・仏教・道教の三教の一つとしての「道教」に限定したことである。（本書では三教の一つとしての道教を指すときには「　」を付して「道教」と呼ぶことにする。）「道教」が道教であると定義すること、即ち道教という概念の指示する対象を歴史的で具体的な「道教」に限定することによって、われわれは初めて「道教とは何か」という問いに答えることができるようになるのである。従来の道教研究では、ともすれば道教の範囲を厳密に規定しないままに道教を論ずるために、道教のなかに「道教」以外の思想や宗教が含まれることが多い。道教のなかに何を含ませるかによって、道教の内容はまったく違ってきてしまうのであるから、「道教とは何か」と問いかけても、研究者によってその答えは一定せず、実にまちまちの答えが返ってくることになる。これでは、一般の人たちはますます混乱し、道教という宗教はよくわからないという印象を強く抱く結果になってしまうのである。

「道教」が道教である、という定義は歴史的で具体的な「道教」に立脚しているだけに、道教という宗教の特性を歴史的に具体的に解明するときに非常に有効な概念規定である。われわれは道教という観念の対象を歴史的に実在してきた「道教」に限定することによって、道教という宗教の構造や教理や教団組織や信奉者の宗教意識、あるいはそれらの歴史的な変遷を具体的に把握できるようになる。また、この定義によって、道教と道教以外の思想や宗教との区別も明確になり、道教と他の思想や宗

教との交渉がより正確に解明できるようになる。更には、道教の他国への伝播の状況も今よりも一層明瞭にすることができるようになるのである。

しかし、この定義はこれまでの道教に関する通説を根底から揺るがすことにもなる。「道教」が道教であると規定すれば、中国には「道教」と呼ばれる宗教が成立する劉宋の中頃（五世紀中葉）以前には道教は存在していなかったことになる。従来の道教研究では道教は中国の後漢時代に成立したというのが通説であるが、上記の定義に従えば、この道教は「道教」ではないから、後漢時代には道教は存在していなかったことになる。また、この定義に従えば、「道教」の範囲からはずれる思想や宗教はすべて道教ではない。従来の道教研究では民間の宗教を指して民衆道教と呼んでいるが、民間信仰は三教の一つとしての「道教」ではないから、民衆道教という道教は存在しないのである。

このように「道教」が道教であると定義すると、従来の道教研究において通説となっていた見解がかなりの部分で修正されなければならなくなる。しかし、そのように定義することによって、これまで曖昧模糊としていた道教の輪郭が鮮明になり、中国で劉宋以降、現代に至るまで、歴代にわたって存続してきた「道教」と呼ばれる宗教の実態がはっきりと具体的に解明されることになるのである。

本書では、「道教」が道教であるという定義に基づいて、道教という宗教の構造と教理と教団組織と信奉者の宗教意識と、更に道教の歴史について思想史的に体系的に研究し、それをできるだけわかりやすく解説することに努めている。本書によって一人でも多くの方が中国の「道教」について正確な理解をもってくださることを切に希望する次第である。

目次

凡例 v
はしがき vii
序章 「道教」の構造 三
一 「道教」の成立 五
二 「道教」の構造 二
三 「道教」と天師道 一四
第一章 神仙道の形成 三
一 五斗米道 二四
二 太平道 四三
三 葛氏道 四六
四 上清派 五四

第二章　「道教」の成立　六七
第一節　天師道の成立とその思想　六八
一　「三天」の思想　七一
二　正一盟威の道　七五
三　老子と『老子道徳経』　八四
四　三洞説と「道教」　九〇
五　四輔説と道士の位階　九五
第二節　教団の組織と教徒の生活　一〇三
I　教団の旧制度――治と祭酒の制度　一〇三
一　祭酒と道民　一〇三
II　教団の改革　一〇九
一　祭酒の戒の設置　一〇九
二　道民の生活倫理　一一三
三　道士の職位の整備　一一六
III　教団の新制度――道館(道観)と出家道士の制度　一四一

一　道館の設置　一四三
二　道館での道士の生活　一四九
三　出家道士の位階制度　一五四

第三節　「道教」の世界観と修道法　一六四

I　世界観　一六四
一　天上界　一六五
二　人間界　一七五
三　三塗　一八〇
四　南宮　一九二
五　洞天福地　一九五

II　修道法　一九九
一　護身法　一九九
二　滅罪法　二〇七
三　長生法　二六二

第三章　「道教」の歴史　二七一
一　南朝の「道教」　二七二
二　北朝の「道教」　二七八
三　隋の「道教」　二八二
四　唐の「道教」　二八四
五　北宋の「道教」　三〇二
六　南宋・金の「道教」　三〇六
七　元の「道教」　三一四
八　明・清の「道教」　三二〇
結　章　「道教」の役割　三二七
注　三三七
あとがき　三六五
索引（事項・書名・人名）　1～23

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

中国の道教

序章　「道教」の構造

「道教とは何か」という問題を考えようとするときに出会う、もっともやっかいな問題は「何が道教であるのか」がはっきりしていないことである。どれが道教であり、どこまでが道教であるのかが明確でないと、道教の概念を正確に規定できないのである。道教の概念の内容が確定されなければ、道教の特色や道教の歴史的展開、あるいは道教の日本文化に与えた影響等を論じても、論ずる人によって全く異なった見解が形成されることになる。今日でもなお、道教の概念規定が曖昧であるために、道教と民間信仰、道教と道家思想、道教と神仙思想をどのように区別すべきか、という問題がいまだに解決されていないのである。現代の世界の道教学者のなかには道教と民間信仰と道家思想と神仙思想の思想的・歴史的な差異を充分に自覚しないままに、相互に結びつけて理解している人が少なからずいるので、民間信仰も道家思想も神仙思想もすべて道教と誤解している人たちがまだ多くいる。その結果、道教の範囲はますます不明瞭になってしまっているのである。

道教という宗教の教理と歴史を明らかにするには、先ず道教の範囲を明確に規定しなければならない。道教の範囲が定まらないと、道教の起源も、道教の歴史的展開も、道教という宗教の特色も明らかにすることができないのである。では、どのようにしたら、道教の範囲を定めることができるのであろうか。

現代の我々が道教と呼んでいる宗教は、中国で儒教や仏教とともに三教の一つとして存在してきた「道教」を指している。議論の出発点で確認しておきたいことは、この「道教」がいわゆる道教を指すということである。換言すれば、中国で歴史的に「道教」と呼ばれている宗教が道教である、とい

うことである。このように概念規定をすれば、道教の範囲はここで論ずるまでもなくおのずから明瞭であるように思われるかもしれないが、実際には、現代の中国の人々の用いる「道教」という語には実に様々な内容が含まれていて、時には「道教」の歴史的展開から見れば、「道教」とは呼び得ないものも混入していることがある。そこで「道教」の範囲を正しく限定するには、「道教」という宗教の構造を明らかにし、それがいつ頃形成されて、どのように展開してきたのかを歴史的に跡付けてみる必要があるのである。

本章では、儒教や仏教と対比される意味での「道教」はいつ頃成立したのか、またその宗教がなぜ「道教」と呼ばれたのか、さらに「道教」と呼ばれる宗教の基本構造はどのようなものか、という問題について考察する。[1]

一　「道教」の成立

「道教」という語が仏教と対比される、特定の宗教を指す名称として用いられる例は、劉宋・泰始三年（四六七）頃に著された顧歡（四二〇―四八三）の『夷夏論』[2]に見られる。『夷夏論』には、

仏教は文〔飾〕にして〔広〕博なり、道教は質〔朴〕にして精〔妙〕なり。

とあり、ここでは「道教」が仏教と対比される、一つの独立した宗教の名称として用いられている。

〔道教〕という語が仏教や儒教と対比されることなく、ただ〔道教〕という語だけが用いられている例は、北魏の寇謙之（三六五？―四四八）の作とされる『老君音誦誡経』[3]（道蔵七八四）に次のよう

に見える。

［張］陵の身に授かる所の黄赤房中の術を妄りに伝へて、人の夫妻に授く。淫風は大いに行はれて、道教を損辱す。

この〔道教〕は儒教や仏教と並ぶ特定の宗教を指しているのか、あるいは道にかなった正しい教えという意味なのか判然としないが、〔道教〕という語が儒教や仏教と対比されて用いられていないという点から考えると、寇謙之は儒教や仏教と区別されるべき特定の宗教を指す意味で〔道教〕を用いたのではなく、自分たちの信奉する教えが道にかなった正しい教えであることを〔道教〕の語をもって表したものと思われる。

仏教と対比されて、明らかに三教の一つとしての「道教」を指している用例は、顧歓の『夷夏論』に見えるのが最初のようである。三教の一つとしての「道教」が顧歓の『夷夏論』に初めて見えることは、この頃の南朝の道教徒が自らの信奉する宗教を儒教や仏教と比肩し得る、一つの独立した聖人の教えとして自覚していたことを示すものであろう。顧歓の『夷夏論』の目的が「道教」と仏教を比較して、結局は「道教」の仏教に対する優越を説くことにあった、ということが何よりもそのことをもの語っていよう。

一つの独立した宗教の名称を表す「道教」という語が顧歓の『夷夏論』に初めて現れるという事実に関連して、先ず次の二点を考察してみたい。第一は、宗教名として、なぜ「道教」という名称が用いられたのか。第二は、「道教」という名称が、なぜ顧歓の『夷夏論』の頃、即ち五世紀中頃の江南

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com